

人生似行客 兩足無停步 人生は行客に似たり 兩足停歩無し

日日進前程 前程幾多路 日日前程を進む 前程幾多の路ぞ

兵刃與水火 盡可違之法 兵刃と水火と 盡く之を違けて去るべし

唯有老到來 人間無避處 唯だ老の到來する有り 人間避くる處無し

感時良爲已 獨倚池南樹 時に感じて良に已めりとなし 獨り池南の樹に倚る

今日送春心 心如別親故 今日春を送る心 心は親故に別るるがごとし

(本文は『白居易集箋校』朱金城著に拠る。)

(訓読みは續国譯漢文大成『白楽天詩集』に拠る。)(傍線筆者)

白居易が元和十年(八一五)四十四歳、太子左贊善太夫の時、長安、曲江のほとりで三月末日に過ぎ行く春を惜しむ心情をうたった作品である。春風に「明日はもうこの地にとどまっていられないだろうな」と問い掛け、花がはらはらと散る様を踏まえて、「人生は旅人(行人)と同じ、少しも停まることをしない」と、月日の流れの無情さを嘆く十三・四句と「兵戦や水火の難を避ける方法もないことはないが」と次の十五・六句でこの十三・四句と対比させて人間の老いの避けようのなきを際立たせる。「ただ老いの到来は人間にはどうしても避けることが出来ないのである」と表現する。だから今の私に迫る「老」はいかんともし難く一人池南の樹に倚って、今年の春との別れを親故のそれにするような心情で惜しんでいるのだと詠む。

このような白詩と道真の詩との内容まで踏み込んだ詩情の比較となると、両者には大きな隔りがあることが自明になる。確かに「老い」というものが、人間には避けようのないものという表現には、白詩の表現の投影を指